

## ジョン・ヒックの人格の哲学 — 『信仰と知識』 から 『宗教の解釈』 へ —

橋田直樹（一橋大学）

### はじめに

（『信仰と知識』<sup>①</sup>に代表される）前期から（『宗教の解釈』<sup>②</sup>に代表される）後期へのジョン・ヒックの立場の変化について、二つの解釈がある。一つは、ゲイヴィン・デコスタによる神学的解釈で、ヒックは前期においてはキリスト教を中心とした排他的立場を守っていたが、後期になると諸宗教を平等に扱う多元論的立場に移行した、というものである。<sup>③</sup> もう一つは、クリストファー・シンキンソンによる哲学的解釈で、前期においても後期においてもヒックは同じカント的立場を堅持しており、前期から後期への立場の変化はない、というものである。<sup>④</sup>

しかしながら、過去の研究においては、具体的にどの議論が、『信仰と知識』から『宗教の解釈』へと受け継がれているのか、あるいは、どのようにその意味が変化しているのか、という点について詳しく検討されているわけではない。本論文は、「自然的観点、倫理的観点、宗教的観点 the natural, the ethical, and the religious」の区別に関するヒックの議論に焦点を絞ることで、ヒックの前期から後期への立場の違いを明らかにしたい。

「自然的観点、倫理的観点、宗教的観点」に関する議論は、『信仰と知識』では第3部第6章「信仰の性質」において、論じられている。『宗教の解釈』では第3部第8章から第13章において論じられている。

その議論の背景となっているのが、イギリス観念論に大きな影響を受けた神学者であるジョン・オーマンの『自然と超自然』<sup>⑤</sup>、また、スコットランドの哲学者であるノーマン・ケンプ・スミスの『カント「純粋理性批判」註解』<sup>⑥</sup>、そして『デイヴィッド・ヒュームの哲学』<sup>⑦</sup>である。

本論文では、まずヒックの『信仰と知識』と『宗教の解釈』における「自然的観点、倫理的観点、宗教的観点」の区別を検討し、次に、その背景にあるカント解釈を検討する。

### 1 『信仰と知識』

ヒックの『信仰と知識』における自然的観点に関する議論は、世界の意義とは何か、ということの説明から始まる。ヒックによれば、

「自然的意義のレベルとは、動物としての人間にとって、環境が持つ意義のことである。動物としての人間は、快樂と生存を求め、苦痛と死を避ける。」<sup>(8)</sup>

「意義とは、最も根底的な、全ての領域に関係する意識経験のことである。それは、我々の「世界」の経験が、単に無や混沌ではなく、事実である、ということの意味している。我々は、周りの環境が比較的安定しており、秩序があり、家にいるようにくつろぐことができる場所であることで、世界が意義のあるものとして感じられる。<sup>(9)</sup>」

自然的観点ということでヒックが意味しているのが、他者の入り込まない「私」だけの観点である。「私」の意識という観点を想定することで始めて、世界が生きるに値する意義を持つのか、ということが問題になる。世界は特定の観点からしか意義を持たない。「意識を欠いた宇宙は、そもそも、意義があるのかどうか、ということが問題にならない。<sup>(10)</sup>」

次にヒックは、独我論の克服、そして他者と共有された世界、という議論に移る。倫理的観点にとって重要な点が、他者の存在である。ヒックによれば、

「世界を知覚する精神は、常に選択し、関連付け、総合している。つまり、我々は、経験を通して、環境を解釈し続けている[・・・]しかし、ここで注目すべきなのは、より根源的な解釈行為である。この根源的な解釈行為によって、我々に物質の世界が実在として現れる。そして、我々は、世界を探求し、そのなかに住むことができるようになる。この根源的な解釈行為とは、独我論を超えて、他者と共有された世界、物が互いに影響を及ぼしあっている世界が実在する、という判断のことである。<sup>(11)</sup>」

ヒックによると、自然的観点は、全く自然ではなく、常に連続した解釈の結果である。解釈をすることによって始めて、「私」がいるのが三次元的空間としての部屋

であり、様々な色彩の関係が壁を構成しており、机には本が乗っていることがわかる。しかし、このような連続した解釈によっては、他者の存在は論証することができない。「独我論の仮説の真偽を証明するような出来事は、この世界には存在しない。(12)」ヒックによると、哲学が証明できるのは、「私」が存在するというだけであり、他者の存在は証明できない。哲学的には、世界の全ては「私」のなかに存在するのであり、他者は「私」の世界の中に存在するに過ぎない。「私」だけが実在し、他の人は、独立した知性と目的を持った世界の中心であるかわりに、人間のように見えるだけなのかもしれない。〔・・・〕常識的精神にとって、このような独我論を真剣に擁護することは非常に難しい。しかし、独我論は論理的には可能な解釈であり、常識とは別の、もう一つの世界解釈である。(13)

しかしながら、独我論を乗り越えて、「私」は他者の存在を信じることができる。「まず独我論を拒否することによって、我々は、類比的に他者の心の実在を信じることができる。(14)」この、自然的観点と区別された倫理的観点において議論されるのが、「私」と他者の関係である。「世界の自然的意義だけではなく、人格と責任の次元においても生きることができる、というのが人間の人間としての特徴である。(15)」人格の交わりにおいて、他者を特別な存在として理解する、というのが、ヒックの議論における人格の倫理的意義である。「ある状況において、「私」が行動する道徳的義務がある、と感じるということは、「私」の世界が、同時に、人格的關係の世界でもあると気づく、ということである。他者には他者の世界秩序があり、自分とは別の世界意義が存在する、ということを意識することで、「私」は直接的あるいは潜在的な「差異」にさらされる。〔・・・〕世界の道徳的意義とは、人格的關係を媒介として、世界が我々に「差異」をもたらすことに他ならない。」(16)

次にヒックは、自然的観点と倫理的観点を前提として、宗教的観点を説明する。ヒックによれば、

「倫理的意義が自然的意義を前提としていたように、宗教的意義は倫理的意義と自然的意義を前提とする。宗教的意義は、最高の、そして究極の世界の意義である。(17)」

「(他者と共有された世界が実在するという) 根源的解釈は、議論によって正当化することができないが、また疑うこともできない。〔・・・〕この根源的解釈

こそ、人生の宗教的重要性を開示する、特異な「全体的解釈」である。(18)

自然的観点が「私」に対応し、倫理的観点が他者に対応していたように、宗教的観点は普通の人／大衆に対応している。「どれほど不完全で断片的なものであれ、普通の宗教的信仰者が経験している神の現前と活動は、日常生活と離れたものではなく、むしろ日常生活のただ中にある。(19)」ヒックによると、神に対する信仰は、普通の人々が常識的に持っているものである。哲学的懐疑論者は、異なる世界を生きる他者のあいだに、共通の世界があることを、信じることができない。対照的に、普通の人々は、他者と共有された共通の世界があることを信じている。この議論の背景として、ヒックはヒュームを引用している。「どのような原因により、我々は物質の存在を信じているのか、と問うことはできる。しかし、そもそも物質は存在するのか、と問うのは馬鹿げている。それは全ての推論において前提としなければならない点である。」(20)

しかし、ここで宗教的観点が普通の人に対応するというのは、倫理的観点が、宗教的観点と無関係なものとしてあるということではない。そうではなく、むしろ普通の人々のなかに潜在的に神への意識があり、普通の人々のなかに、人格的向上という倫理的規範を通して、神は現前しているということの意味している。「道徳的な人格というのは、環境への自由な応答を通して徐々につくられる。そのようなプロセスを通して、人間は、無私や愛、勇気といった特質を発展させることができる。

〔・・・〕現在の有限の悪を克服することが、同時に、未来の無限の愛を実現することである。(21)

ヒックにとって世界の宗教的意義とは、他者と共有された世界の实在を信じ、その背後に存在する共通の神を信じることを意味する。「神との意識的な関係に入るといことは、世界を神の愛によって統治されたものとして見るということであり、それぞれの個人が無限の価値を持ち、全ての人類がその中に含まれている、と信じることである。(22)」このことを、ヒックは、自然のなかに超自然を見出す、と説明する。「問題は、世界とのかかわりの中から神を信じることができるかどうか、ということであり、それが自然のなかの超自然ということの意味である。(23)」

ヒックのこのような議論の背景にあるのが、ジョン・オーマンによるキリスト教信仰の理解である。ヒックは、ジョン・オーマンの『自然と超自然』から、次の箇所を引用している。

「キリスト教徒の信仰を決定的なものにしているのは、超自然に関する理論ではなく、自然に対する態度である。キリスト教徒は、見えるものの中に深い意味を、そして移り行くものの中に永遠の目的を見出す。〔・・・〕超自然は、自然との和解のただなかから自らを現す。それは、自然の中に、超自然の意味と目的を見出すことによって可能となる。<sup>(24)</sup>」

ヒックは『信仰と知識』の序文で、次のように述べている。「自然の中から、自然を通して、超自然を理解するというオーマンの考え方は、私にとって、宗教的知識の問題に対する重要なカギとなるように思われる。〔・・・〕批判であれ解説であれ、この本はオーマンの議論について詳細には議論しない。しかし、オーマンの『自然と超自然』(1931)に親しんでいる読者であれば、この本が、オーマンの基本的な立場を、現代哲学という全く異なる世界で展開しようとする試みであることがわかるだろう。」<sup>(25)</sup> ヒックやオーマンにとって、世界の宗教的意義とは、根源的に異なる他者による共通世界の創造であり、他者とともに創造するという意味で、積極的自由の行使である。「世界を宗教的に解釈するとは、自らがその世界を構成するものとして世界のなかに巻き込まれるということであり、そのような実践的な要求に晒され続けるということである。<sup>(26)</sup>」

## 2 『宗教の解釈』

『宗教の解釈』においても、ヒックは自然、倫理、宗教の区別をしている。ヒックにとって自然的観点とは、世界が安定しているということであり、それは特定の観点から世界に意味がある、ということである。ヒックによれば、

「世界に意味があるとは、世界を知りうるということである。知りうるというのは、合理的理解ができるということではなく、世界の中で適切にふるまうことができるということである。〔・・・〕我々はどこでもない場所から世界を観察しているわけではなく、実際に、世界の一部分として、世界に働きかけ、世界から働きかけることで存在している。<sup>(27)</sup>」

次に、ヒックにとって倫理的観点とは、「私」の世界に差異をもたらすものとしての他者が存在する、ということである。ヒックによれば、

「他者に対峙するとは、世界とは独立に存在する別の意識の存在に気付く、ということである。[・・・] 他者の現前において、二つの世界評価が出会い、私は裁くと同時に裁かれる。私は他者を意識するのみならず、他者が私を意識しているということ、意識する。(28)」

また、宗教的観点とは、他者と共有された世界、そしてその背後に存在する神への信仰のことである。ヒックによれば、

「神との交わりにおいて、未来の無限の善が、世界の創造的プロセスとして現れる、という宗教的宇宙理解を受け入れた者は、哲学的懐疑の可能性にもかかわらず、世界の創造的プロセスへの参与のうちに神の实在を見出す。(29)」

『宗教の解釈』においても、宗教的観念を擁護するために、ヒックはヒュームに依拠している。「このようにして我々は、ヒュームの「自然的信念」のようなものにたどり着く。ノーマン・ケンプ・スミスの解釈によると、ヒュームは、体系的な懐疑論者なのではない。[・・・] つまり、我々は知覚した世界の客観性を信じざるを得ないように造られている。哲学的懐疑の瞬間においては、我々は世界の实在を疑うことができる。しかし、「物質の实在」に対する自然的信念は、哲学的懐疑を超えて、自らを主張する。」(30)

自然、倫理、宗教の区別を、『信仰と知識』は、キリスト教信仰の擁護として論じた。『宗教の解釈』も同じ区別を踏襲している。しかし、『宗教の解釈』は、同じ議論を宗教間の関係の議論へと転用した。ヒックによれば、

「我々の現在の自己を超越した、別の实在から来る無限に善い可能性があるという主張、簡単に言うと、これが枢軸時代以後の宗教が持つ宇宙的楽観主義である。(31)」

「偉大な宗教的伝統がそれぞれ持っている宇宙的楽観主義によると、我々は、無

限に善い可能性に向かっており、その無限に善い可能性を、今ここにおいて現実化しつつある。<sup>(32)</sup>

『信仰と知識』から『宗教の解釈』への変化において、大きな役割を果たしているのが、ウィトゲンシュタイン的言語・文化としての宗教理解である。『信仰と知識』において議論の中心となっていたのは人格間の関係であった。しかし、『宗教の解釈』においては、ウィトゲンシュタイン的言語・文化としての宗教理解が受け入れられることにより、文化間の関係も議論されている。ヒックは、自らのウィトゲンシュタイン理解を次のような文章で表している。

「直接的な意識であれ、究極的環境に関する意識であれ、全ての意識は、特定の社会や伝統の言語に埋め込まれた概念システムによって形成されている。<sup>(33)</sup>」

「宗教的かどうかにかかわらず、異なる伝統、運動、イデオロギーは、共通の本質をもたず、家族のように複雑な類似性と差異性をもつ。」<sup>(34)</sup>

しかし、ヒックによると、ウィトゲンシュタイン的観点は、それ自体としては反実在論的なものにとどまり、「宇宙の究極的善という観念の否定」を意味する<sup>(35)</sup>。つまり、ヒックによれば、ウィトゲンシュタイン的言語・文化として宗教を理解することは、様々な宗教間差異を尊重することにつながるのではあるが、積極的に相互の交流を図るところまでは至らない。言語・社会としての宗教には、他者、そして実在という観点が欠けているためである。もし言語・文化としての宗教理解が、様々な宗教のあいだの交流を閉じてしまうようなことになれば、「世界が、歴史的に、全体として、徐々に良い方向へと向かっているという希望が、実は幻想なのではないか、という疑いを抑えることができない。<sup>(36)</sup>」ヒックによると、ウィトゲンシュタイン的観点に欠けているのは、言語・文化の外の実在に対する観点である。言語・文化の外の実在という観点を加え、「我々の実存に意味と価値を与える超越的な何か<sup>(37)</sup>」という観点を加えることで、言語・文化としての宗教理解は、真に他者へと開かれたものになる。ヒックによれば、

「宗教的経験や信仰の領域は、全体として、人間による投影や幻想ではなく、文

化ごとに異なる、超越的實在の現前への様々な応答を構成している。(38)』

この超越的實在の擁護が、ヒックの人格間関係論と言語文化論をつないでいる。つまり、人格間関係論において、ヒックは、他者の人格の承認が實在論につながると議論しているのであるが、言語文化論において、ヒックは、多様な宗教の承認が實在論につながると議論しているのである。

『信仰と知識』と『宗教の解釈』の違いの一つが、ウィトゲンシュタイン的言語・文化としての宗教理解である。『信仰と知識』においては、人格間関係が主に議論されていた。『宗教の解釈』においては、人格間関係に加えて、ウィトゲンシュタイン的言語・文化としての宗教理解も、人格間関係とは別な議論として追加されている。そして、ウィトゲンシュタイン的言語・文化としての宗教理解は重要ではあるけれども、その反實在論的立場には問題があり、是正される必要がある、というのがヒックの議論である。

### 3 カント『純粋理性批判』

自伝によると、ヒックのカント解釈は、ケンプ・スミスに影響を受けている。ヒックによれば、

「私は、深くケンプ・スミスに影響された。[・・・] ケンプ・スミスは最後の観念論者の一人であり、著名なカントの解釈者であった。[・・・] 私がカントの重要性に気づかされたのは、ケンプ・スミスによる。[・・・] 私がカントから学んだのは、私が「批判的實在論」と呼んでいる立場であり、次のようなことである。世界、あるいは宇宙は、我々とは独立に存在しているが、しかし我々は、人間の感性的装置と概念的システムを通してしか、それを知ることができない。(39)』

ここでヒックは、矛盾する主張、つまり「私」の外側に世界があるという主張と、「私」の内側に世界があるという2つの主張を同時にしている。この点は、ケンプ・スミスのカント解釈、特に「私」の主観性と客観性のあいだの矛盾の重視、に由来していると考えることができる。例えば、ケンプ・スミスはカントの次のような文



章を引用し、『純粋理性批判』を解釈する際に、「私」という概念が重要であることを指摘している。

「私は、私に対して、私を意識している——つまり二人の私がいるのである。主観的私と、客観的私である。考えているこの私が、同時に私という対象であり、二つの私を区別することができるということは、説明しがたいことであるが、同時に疑いえない事実でもある。(40)」

ケンプ・スミスの『カント『純粋理性批判』註解』によると、時間と空間という形式は、主観性と客観性の両方の特徴を備えている。そして、この矛盾性はそもそも「私」が主観性と客観性という矛盾した性質を備えていることに由来する。そして、この矛盾性は、「私」による世界の判断を通して徐々に解決される、という性質を持つ。ケンプ・スミスによれば、

「時間の意識、空間における対象の意識、自己の意識は、カントが分析しようとした三つの経験の様態である。この三つは、互いに切り離すことができず、全体として意識経験を構成し、判断という行為をおこなう。つまり、意識の形式が、同時に、関係カテゴリーや普遍概念に関わっている。(41)」

ここで特に重要なのが、時間という形式である。「私」に由来する主観と客観の矛盾は、時間性に従って徐々に解決される。つまり、「私」が世界を探求することによって、徐々に世界の性質が明らかになる。そして、このことは同時に、世界の性質が徐々に人類に対して明らかになる、ということの意味する。つまり、個人的観点からすると、「私」に対して徐々に世界が明らかになるのであるが、そのことは人類全体という観点からすると、人類の知識の進歩を意味する。ケンプ・スミスによれば、

「我々の精神は、同時に、意識が明らかにする自然秩序の一部である。我々の精神は、客観的に実在する経験的自己を構成し、さらに、経験的自己は物質的環境に統合される。主観的であるということは、客観的であることに対立するのではない。主観は、客観の、下位概念である。(42)」

ヒックによる主観と客観の関係の理解は、次のようなものである。「精神が、概念にしたがって、能動的に感覚的情報を解釈することで、意識経験として感覚される環境が、空間における三次元的な対象として、現れる。つまり、我々が主体的に働きかけることで、同時に、世界が、働きかけると同時に働きかけることのできる、客観的对象として、現れる。これが、高度に一般化された、カントによる知覚の形式とカテゴリーの理論である。」<sup>(43)</sup>また、ケンプ・スミスのカント解釈に従うと、世界史は、主観／客観の弁証法による世界精神の時間的顕現として理解される。

哲学史的に理解すると、ヒックの『宗教の解釈』の特徴は、カント的な主観／客観の弁証法による世界精神の時間的顕現という宗教理解と、ウィトゲンシュタインの言語・文化としての宗教理解、という2つの宗教理解を組み合わせた点にある。まず、ヒックによると、カント的カテゴリーは、時間性として図式化される。

「(実体のような) 悟性の純粹カテゴリー、あるいは純粹概念、は時間性に従って図式化される。つまり、我々の現実の世界経験において、より具体的なカテゴリーを生み出す(従って、例えば、実体という純粹概念は、持続する物体という、より具体的観念として図式化される)。」<sup>(44)</sup>

そして、カント的時間性とウィトゲンシュタイン的言語・文化は、重なり合うものとして理解される。ヒックによれば、

「(カント的カテゴリーの図式化としての時間に対し、) それを具体化するのが文化である。文化は、超越的意識という人間の複雑な潜在性を、相互に重なり合った、平面的差異へと現実化させる。」<sup>(45)</sup>

第2節で論じたように、ヒックによるウィトゲンシュタイン的言語・文化論は、多様な宗教の承認が実在論につながるという議論であった。そこでは、多様な宗教が相互に交流することが、実在論を背景として論じられていた。また、カントに関する議論においては、世界には主観性と客観性の二面性があり、その二面性が相互に交流することが、世界の歴史的発展として議論されていた。

この引用でヒックは、カントに関する議論と、ウィトゲンシュタインに関する議

論を、時間論と文化論として、関係づけようとしている。まず、ウィトゲンシュタイン的言語・文化としての宗教理解は、宗教の多様性の認識につながっているが、それだけでは他宗教との交流にまでは至らない。他宗教との交流に至るには、言語・文化の外部の存在に対する認識がなければならない。この認識を埋めるのがカントに関する議論である。カントの議論に従うと、人間の認識は発展し続けるものであって、常に主観的理解は、客観的実在によって訂正され続ける。つまり、ヒックによるカントとウィトゲンシュタインの議論は、多様な宗教の交流を、多様な宗教による主観的理解は客観的実在によって訂正され続け、そしてそれは世界の歴史的發展につながっている、という世界観として議論したものとして理解することができる。

## おわりに

「自然的観点、倫理的観点、宗教的観点」の検討によって明らかになることが三つある。第一に、「自然的観点、倫理的観点、宗教的観点」に関する議論は、(従来論じられてきたように) 三つの別の議論として論じるべきではなく、一つのまとまった議論として理解すべきだということである。そして、そこで論じられているのが、「他者を人格として認めることで、「私」も人格として認められる」という、人格の哲学である。

第二に、この人格という考え方は、前期から後期まで一貫して擁護されている。常にヒックは、人格を物と区別している。そして、個人を人格として、つまり予測可能な物ではなく、自由意志を持った特別な存在として理解することが、ヒックにとって、宗教の重要な意味として考えられている。

第三に、ヒックの神の理解が、キリスト教信仰から宗教多元主義への発展を導いている。ヒックによれば、「私」は神の存在を直接経験できず、他者との関係を媒介としてしか神の存在を経験できない。「私」のみが人格、つまり自由意志を持った特別な存在であり、他者は人格ではない、という主張は、「私」が他者を予測可能な物として扱うことに帰着する。「私」による他者の人格の否定は、逆に、他者が「私」を物として扱うことを否定できず、結局「私」の人格をも否定することになる。そのような自他の人格の否定にあらがい、自他の交流において予測不可能な他者の人格を信頼することで、はじめて「私」も自らを人格として信頼することができる。

できる。この自他の人格の承認が、ヒックにとって、神の存在の経験の前提となっている。

第二の点と第三の点は、相反する主張として構想されている。つまり、第二の点は、個人的自由の擁護であるが、第三の点は、むしろ個人的自由の制限であり、共同体的規範の擁護である。しかしながら、ヒックの意図としては、個人的自由と共同体的規範は矛盾しない。なぜなら、共同体的規範とは、他者とともに行う共通の世界の創造であり、他者とともに創造するという意味で、積極的自由の行使だからである。

## 注

- (1) John Hick, *Faith and Knowledge: A Modern Introduction to the Problem of Religious Knowledge*, First Edition, Ithaca, New York, Cornell University Press, 1957.
- (2) John Hick, *An Interpretation of Religion: Human Responses to the Transcendent*, Basingstoke, Macmillan Press, 1989.
- (3) Gavin D'Costa, *The Meeting of Religions and the Trinity*, Edinburgh, T&T Clark, 2000, pp. 24-29.
- (4) Christopher Sinkinson, *The Universe of Faiths: A Critical Study of John Hick's Religious Pluralism*, Cumbria, Paternoster Publishing, 2001, p.25.
- (5) John Oman, *The Natural and the Supernatural*, London, Cambridge University Press, 1931.
- (6) Norman Kemp Smith, *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, London, Macmillan, 1918. ヒックは、自伝で、次のように述べている。「哲学的な読者は、『信仰と知識』のなかにも、エジンバラのケンプ・スミスに由来する、カントの影響を読み取ることができるだろう。」John Hick, *An Autobiography*, Oxford, Oneworld Publications, 2002, p. 115.
- (7) Norman Kemp Smith, *The Philosophy of David Hume: A Critical Study of its Origins and Central Doctrines*, London, Macmillan, 1941.
- (8) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 122.
- (9) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 112.

- (10) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 115.
- (11) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 122. 引用者による省略は、〔・・・〕で表す。
- (12) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 123.
- (13) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, pp. 123-124.
- (14) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 123.
- (15) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 125. ヒックが人格概念について言及するのは、独我論に関する認識論的な議論から一步進んで、倫理について議論をするときである。そこでヒックは、「たんに物理的法則にしたがう物体ではなく、自由意志を備えた精神でもある」という意味で人格概念を用いている。
- その背景には、カントの道徳哲学があると想像できるが、ヒックが言及するのは『純粋理性批判』の認識論のみで『実践理性批判』の道徳哲学には全く言及していない。むしろヒックが言及しているのは、イギリスの長老派を中心としたキリスト教神学者による護教論的な人格概念の擁護である。つまり、唯物論的宗教批判に対して、プロテスタンティズムは人格概念を擁護し、個人の精神性を擁護するという議論である。より具体的には、ヒックは『宗教の解釈』において、ジョン・オーマンの『恩寵と人格 Grace and Personality』から特に影響を受けたと述べ、さらにエミール・ブルンナー (Emil Brunner)、H. H. ファーマー (H. H. Farmer)、ジョン・マクマーリー (John Macmurray) の名前を挙げている。また、これらの神学者に加えて、マルティン・ブーバー、ボストン人格主義 (ボーデン・パーカー・ボウン (Borden Parker Bowne) など) からも影響を受けたと述べている。
- また、これらの神学者に対する言及、特にジョン・マクマーリーやボストン人格主義に対する言及からわかることの一つは、ヒックがプロテスタンティズムによる社会的運動、つまり社会的に虐げられていたものを擁護するための宗教的運動ということを念頭に置いていたことが分かる。John Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 145 を参照。
- (16) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, pp. 164 and 169. また、ヒックは次のようにも述べている。「宗教的観点からすると宇宙は多層的である。つまり、人間は単に動物であるだけでなく、死後も生き続ける人格を備えた精神的

存在である。」 Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 150.

- (17) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 127.
- (18) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 129.
- (19) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 110.
- (20) Hume, *Treatise*, bk. I, pt. IV, sec. 2 (Selby-Bigge's ed., pp. 187-88), quoted in Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 125.
- (21) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 141.
- (22) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 129.
- (23) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 110.
- (24) Oman, *The Natural and the Supernatural*, p. 448, quoted in Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 130.
- (25) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. xix.
- (26) Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 186. 「知識とは、未知の外部の原因からの結果ではない。そうではなく、我々が能動的に環境を解釈することで明らかになる、現実である。」 Oman, *The Natural and the Supernatural*, p. 175, quoted in Hick, *Faith and Knowledge*, First Edition, p. 166.
- (27) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 131.
- (28) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 145. 「人格の交わりという共同体に参加することによって、「私」は人格であることができる。」 Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 146.
- (29) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 179.
- (30) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 213. The quotation is from Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. L. A. Selby-Bigge, London, Oxford University Press, 1968, p. 187. See also Norman Kemp Smith, *The Philosophy of David Hume*, London, Macmillan, 1941.
- (31) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 56.
- (32) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 380.
- (33) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 173. 「全ての経験は概念的解釈であり、言語的意味によって満たされ、変形され、色付けされている。」 Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 142.

ヒックのウィトゲンシュタインに関する議論の背景として、宗教哲学やキリス

ト教神学におけるウィトゲンシュタインの受容ということが考えられる。具体的には、ヒックはD・Z・フィリップス (D. Z. Phillips) のような新ウィトゲンシュタイン派の哲学者やジョージ・リンドベック (George Lindbeck) のようなポストリベラル神学者を念頭に置いている。Hick, *An Interpretation of Religion*, pp. 360-61.

- (34) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 4.
- (35) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 207.
- (36) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 207.
- (37) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 172.
- (38) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 175.
- (39) Hick, *An Autobiography*, pp. 66-69.
- (40) Immanuel Kant, 'Concerning the Advances made by Metaphysics since Leibniz and Wolff' in *Werke*, VIII, ed. Hartenstein, pp. 530-1, quoted in Kemp Smith, *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, p. li.
- (41) Kemp Smith, *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, p. xxxiv.
- (42) Kemp Smith, *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, p. xlvi.
- (43) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 240.
- (44) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 243.
- (45) Hick, *An Interpretation of Religion*, p. 245.

## 参考文献

- D'Costa, Gavin, *The Meeting of Religions and the Trinity*, Edinburgh, T&T Clark, 2000, pp. 24-29.
- Hick, John, *Faith and Knowledge: A Modern Introduction to the Problem of Religious Knowledge*, First Edition, Ithaca, New York, Cornell University Press, 1957.
- Hick, John, *An Interpretation of Religion, Human Responses to the Transcendent*, Basingstoke, Macmillan Press, 1989.
- Hick, John, *An Autobiography*, Oxford, Oneworld Publications, 2002.
- Kemp Smith, Norman, *Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*,

London, Macmillan, 1918.

Kemp Smith, Norman, *The Philosophy of David Hume, A Critical Study of its Origins and Central Doctrines*, London, Macmillan, 1941.

Oman, John, *The Natural and the Supernatural*, London, Cambridge University Press, 1931.

Sinkinson, Christopher, *The Universe of Faiths: A Critical Study of John Hick's Religious Pluralism*, Cumbria. Paternoster Publishing, 2001, p.25.